

資料涉猟余話

その78

本欄、資料涉猟余話 この43句は『文庫』にその74で、明治の俳句投稿した作品といふ人、木下釣月の六冊の

稿と同時期の明治31年12月号に十句が掲載された(写真参照)。この時の選者は石井露月。その直前まで高濱虚子が選者をしてきたが、虚子が雑誌『ほととぎす』の発行人となつたので露月に『文庫』を譲つたのだろ

う。釣月としては虚子に選んでもらおうとの投句だったのかもしれない。

子規高弟 石井露月による 木下釣月俳句評

投稿雑誌『文庫』俳句欄より

竹村雄次

『俳句稿集』『月光風聲』を紹介した。その中の一冊、明治31年11〜12月の集は、俳句仲間からの手紙や投稿作品の草稿などを綴つた雑然とした集である。読みにくいページが多いが、その中に「俳句四季雑題」と題があり、筆とペンで俳句が書かれたページがあった(写真参照)。題下にペンで「四十三句」題上には朱墨で「文庫へ投ぜし」と書かれている。

『投ぜし』というのは投稿したという意味。品は『月光風聲』の草

を調べてみると釣月作

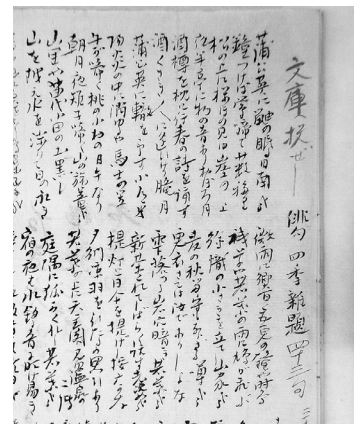
の山を越え水を渉りて

短夜や連歌戻りの鶏

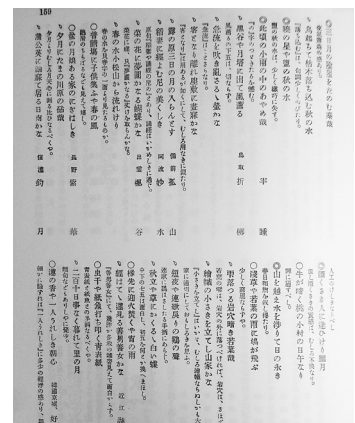
とつては厳しい評価

投句だったようだ。一

回だけに終わったのは、選者が露月に代わつていたことや、思ったほどの評価を得ることが出来なかつたことなどがあるだろう。



木下釣月『月光風聲』より「文庫へ投ぜし」俳句のページ



『文庫』明治31年12月号 俳句欄の釣月作品

を叙し得たり。浅草や若葉の雨に鳩が飛ぶ…少しく窮屈ならずや。隼落つる岩穴暗き若葉哉…若葉の雫は、岩穴の外に落つづけければ、岩穴は、さほど妙なりとも覺えず。

の聲…連歌に鶏はさしたる手柄にあらし。秋立や草にかくるる白い蝶…中下の七五は面白し、初五を何と

か換へまほし。椽先に迎火焚くや宵の雨(同句は評無し)

43句応募して10句選ばれ(二、三、五、そして以上のような評。これを他の投句者と比較することは難しいが、高い評価を得たと言ひ難い。釣月にとつては厳しい評価

しきなるべし。酒くさき人に逢ひけり朧月…但し酒くさきの実感は、むしろ不快なり。露月は秋田出身。子規の弟子としては虚子、碧梧桐に次ぐ存在。露月は虚子からの

釣月はこの直後、越中高岡の越友会、松本の松聲會などの句会へ参加投句し、積極的に自分の句を評価してもらつたようになつて

きを立てしはいかば。むしろ絵幟ならぬしかも大なるが立てる、却つて山家に適切にておもしろきを思

たと言ひ難い。釣月にとつては厳しい評価

う。短夜や連歌戻りの鶏

とつては厳しい評価

とつては厳しい評価

とつては厳しい評価

とつては厳しい評価

とつては厳しい評価